



今月の野菜紹介

たまねぎ

◆大切な品種選び

たまねぎには、いろいろな品種がありますが、品種によって貯蔵性や肥大性が変わるので、他の作物以上に品種選びが大切です。

早生や極早生の品種は、その名の通り、肥大が始まるのが早く、出荷時期も早めることができるのが特徴です。しかし、貯蔵性は悪いので、保存するには適しません。

一方で、中生や晩生の品種は、球の肥大は遅いものの、貯蔵性が良く、また萌芽も遅いのが特徴です。

それぞれ、品種の特性を理解した上で、目的にあった品種選びをすることが大切です。

◆トウ立ちをさせないために

たまねぎを作る場合、いかにトウ立ちさせないようにするのが非常に大切です。



①大きい株の状態です冬を迎えない

たまねぎは、ある程度大きく育った株が、冬の寒さに遭うと春にトウが立ってしまいます。そのため、**播種や定植の時期は必ず守り、無理な早播きは絶対に禁物**です。

また、近年のトウ立ち原因で多いのは、以前と同じ時期に作付をしても、暖冬により生育が進み大きな株になってしまうケースもよくあります。そのため、これまでの慣例の時期よりも数日播種や定植を遅らせたり、元肥は最小限に抑えるなどして、**年内に生育が進みすぎないようにすることが大切です。**

②冬の時期に肥料不足を起さない

たまねぎは、1〜2月の冬の時期に肥料が不足すると、生殖生長が進み、春にトウ立ちしやすくなる傾向があります。そのため、年を越して、**1〜2月の時期に、雪の合間に追肥を行い、肥切れを起さないことが大切です。**

◆追肥は3月いっぱいまで

たまねぎ作りでは、年を越した時期から追肥をしていきますが、その追肥は3月いっぱいをメドに終わらせるのが一般的です。

4月以降も追肥を続けていくと、球の

肥大は良くなり

ますが、貯蔵時の腐敗が増える傾向にあります。

そのため、貯蔵をする場合は、追肥は彼岸〜3月末で終えるようにし、4月に入ったら追肥はやらないようにします。



知っておきたい病害虫

さび病

【症状】

さび病は、いくつかの作物に発生することが知られていますが、その中でも、ねぎやんにくとといったユリ科作物で発生するのが一番有名です。

その名の通り、葉にさび色に盛り上がった小斑点が発生する病気です。気温が低下してくる10月頃から発生が目立つ病気



ですが、5〜6月といった初夏の時期にも発生が見られます。

発生初期は部分的に病気が発生していても、数日では場全体に広がるほど、感染力の高い病気です。また、近年は収穫できず放置したねぎや収穫間近のいんから、初夏の大発生に繋がるケースもよくあります。そのため、注意をしてほ場を観察することが大切です。

【主な対策】

- 窒素過多になると発生しやすくなるので多肥に注意する。
- 風通しが悪く、加湿になると発生しやすいので注意をする。
- 少しでもかけ残しがあると、そこから病気が蔓延する危険性があるので、かけムラが無いように丁寧に散布をする。
- 薬剤抵抗性の発生を防ぐため、作用特性の違う薬剤の交互散布やローテーション散布を行う。
- アミスター20フロアブル
- ストロビーフロアブル
- オンリーワンフロアブル
- ラーリー水和剤 など

※適用内容は品目によって異なりますので確認の上、使用してください。